

# 小學校入學準備について

東京女子高等師範學校附屬小學校主事

堀

七

藏

—  
毎年今頃になると、小學校の入學に關していろいろな質問を受けるのでありますが、その中には小學校入學檢定の準備に關するものが最も多いのであります。入學すべき児童をもてる親達ばかりでなく、幼稚園の保姆諸君も入學檢定の準備をさんなにすれば有效であるか質問する方が多いのであります。

一體小學校の入學檢定には二通りあります。その一は高等師範學校、女子高等師範學校、府縣立師範學校等の附屬小學校、また私立小學校などで入學者を決定するために行ふものであります。他の一は市町村立の公小學校で入學の際に行ふ檢定であります。後者は當然入學すべき児童であるが、小學校の教育教授を適當に行ふ準備として豫め入學前の身體情況を主として知るために行ふものであります。それで普通に小學校の入學準備として八ケましく質問せられるのは前者、即ち入學を決定する檢定についての準備に關するものであります。

—  
二

さて附屬小學校なごの入學檢定では、専ら滿六歳児として身體精神共に正常な發達をなしてゐるか否かを檢するものがあります。従つて小學校の入學檢定では先づ身體検査が行はれるのであります。滿六歳の児童として身體が正常に發育し

てゐるか、四肢感覺器官等に著しい故障がありはしないか、身體が著しく虚弱でありはしないか等を檢するのが普通であります。故に小學校入學檢定準備としては、特に注意して風邪等の病氣にかゝらぬやうにせねばなりません。幼少な兒童に無理をさせて病氣にかゝらせるやうな愚を敢へてしてはなりません。檢定當日、病氣で著しく發熱してゐるやうでは檢定を受けるこゝが出来ませんから、特に注意して兒童の保健に努めねばなりません。尤も不幸にして檢定當日病氣にかゝつてゐるこゝには決して無理をして檢定に出席させてはなりません。無理をしてまで檢定を受けさせるのは誠に危険なこゝで愚の骨頂といはねばなりません。

それから檢定の時、兒童の眼、耳、鼻等に故障の多いものが少くないのでありますが、是等は前以て、治療すべきものは十分治療し、手當をなすべきものは相當の手當をなすやうにすることが肝要であります。檢定當日になつて騒ぐやうではいけません。

### 三

兒童が始めて多くの教師の面前に於て、いろ／＼のこゝをきかれるのが多くの入學檢定に於て普通のこゝでありますから、この點についても相當の準備を必要とする方があります。所謂うち辨慶で、お家では頗る賑かに何でも話をなし、うけ答をなし、時には頗る腕白でありおしやまで困る位な子供でも、他人の前では口を緘して一言も返事をせぬといふ者があります。また泣いてばかりゐて、檢定する者の間に一切答へずに通りすぎるものがあります。こんな子供さんは幼稚園に出すなり、また幼稚園を參觀させるなり、或は他人の中に出して遊ばせるなりして、人見知りをしないやうに慣らすこゝが肝要であります。あまりお宅にばかりゐて、おざいさんやおばあさんばかり遊んでゐたり、女中や書生とのみ遊ん

でゐる子供の中には、往々、いかみ屋が出来ますから注意をする必要があります。それかこいつて大人を小馬鹿にするやうな態度の子供さんが往々にしてあります。これは一寸特例ではありますが、曾つて某附屬小學校の検定で、大臣のお孫さんが受検して次のやうな逸話を産んだこががあります。

「このボールを向かふになげなさい」こ、検定者がその子供に申しますこ。

「僕いやだ」こいつて容易にボールを投げません。そこで検定者は、

「どうして投げないか」こ、尋ねますこ、その子供は

「そんな小さなゴムボールなんか投げない。地球のやうに大きなボールなら投げるけこ」こ、いつて頑こして検定者の命を守らなかつたのであります。これは附添への書生から受けた影響であつたらしいのであります。

その児童に更に別の検定者が他の検定室で何を尋ねても決して答へないのであります。そしてそのいふこが頗る始末が悪いのであります。それは「先生のやうなものには答へない」こいふのであります。この子供にはおぢいさんの大臣であるこが強く印象づけられてゐたのでありませう。子供の周囲の人達がこの子供をおだて上げたもので、先生のいふこなこはきかないこいふ誤つた考を一時でも起させたものであります。誠に恐るべきこであります。

また別の話でありますが、一女児が第一検定室で走らせた時、他の子供より一寸おくれたので泣き出したこがあります。そしてその女兒は第二検定室で泣きつゞけて凡ての検定者の間には一切答へないのであります。そして走つたこきに一寸まけたのがくやしいからやり直すこ固執して動かないのです。これも頗る我儘な児童であり、殆き答へず仕舞であるからその得点は零であり、無論不合格となるより外ないのであります。素質からいへば不合格になる子供でないかも知れませんが、こんな我儘な者を強ひて入學させねばならぬこは毫もないのであります。

小學校入學檢定準備として、「こんなことを教へねばなりませんか」といふ答に對しては、直に「何も教へる必要がありません」と答へるのが普通であります。するに重ねて「それでも數は百まで教へねばなりませんか」とか、「私のところの子供は五十まで勸定出來ますが、それから上は出來ません。それでもよいでせうか」といはれる親が多いのであります。實はかゝる親達に對して私は誠に答辯に窮するのであります。何故かといへば、漸く滿六歳になつたかならぬ位の幼兒を大人同様に考へて居られる親達の誤謬を容易にくくることが出來ないからであります。即ち數詞と數觀念の發達を全く混同してゐる親達や保姆の誤謬を根本的に打破するに頗る骨が折れるのであります。

しかし私は茲に一つの實話を述べてかゝる親達並に保姆の熟考を促すことにいたしませう。それは曾つて郡山驛から五歳位の幼兒を連れだした一紳士が汽車に乗込んだときの私の見聞談であります。初の間はこの幼兒は二等車の座席がすいてゐたから、上つたり下りたりして遊んでゐました。幼兒が頗る活動性に富んでゐるのは男兒でも女兒でも同じであります。多くの親達は「何です女の癖にお轉變をして。靜かに腰かけてゐなさい。」とたしなめするところでもあります。その幼兒の父親は頗る寛大であります。教育的な識見があつてか、またお友達の話に夢中であるのか、兎に角幼兒の活動するに任せて何等の小言もいはず放任してゐます。しかしその中に幼兒の方もあきが來たのでせう。しきりにお父さんの手を引張つて、「早く汽車を降りませう」とせがみます。父親はまだ下車すべき宇都宮に來ないのですが、あまり幼兒がせがみますので仕方なく、

「サア下りませう」といつて座席を立上りました。けれどもまだ降りる譯に行きません。尤も幼兒は父親が立上つたの

で、下車することを直ぐに忘れたのでせう。今まで引ばつてゐた父親の左手の指を、親指の方から數へ出したのであります。そして、

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、おとうさんの手も五つあるといつて女兒は驚いてゐます。するに父親は心あつたかどうかわりませんが、その左手を裏返して掌を女兒に向けたのであります。恐らく特に教育的な考があつた譯ではなく、「おれようく」「さいふ女兒をだます一手段さしたものでせう。しかし女兒は父親の左手の指を今度は中指の方から數へて、」  
 「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、こゝからも五つある」を、再び驚いてゐます。更に二度も三度も繰返して、一つ、二つ、三つ、四つ、五つを數へてゐるのであります。するに父親は左手の代りに右手を女兒の前にさし出しましたので、今度は右手の指を數へ始めました。矢張り、

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ」を繰返して數へ、「この手も五つある」といつて不思議がつてゐます。

その中に、列車は宇都宮に着いて、かの女兒は父親と共に下車したのであります。

この實話によつて次の事項に注意して頂きたいのであります。

(一)五歳位の幼兒は手と指とを區別してゐないこと、指でも手といつて平氣でゐること。

(二)何でも實物を「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ」を數へること。また「一、二、三、四、五」を數へることが出来ないこと。勿論「一本、二本、三本、四本、五本」を所謂名數として數へることが出来ないこと。そしてビスケツトでもお蜜柑でも必ず實物を「一つ、二つ、三つ」「……」を數へることを繰返すことによつて、次第に實物をはなれて一つ、二つ、三つ、四つ、五つといふ稍々抽象的な數觀念が發達すること。

(三)幼兒は初め實物について「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ」を數へてゐるが、右から數へても五つ、左から數へても

五つであること、自分の手も五つ、おさうさんの手も五つであること、右の手も五つ、左の手も五つであること等は五歳の幼児には新しい大発見であること。

等に注意して考へねばなりません。一體大人からいへば五つの觀念と五の數觀念と何等の差異がなく、その數觀念と五つ、また五の數詞とは密接不離のものになつてゐるが、五の數觀念の發達階梯にある幼児では、大人の觀念と大に異なるものがあります。それで一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、なご、數詞を記憶してそれを鸚鵡返しに言つても決して十の數觀念が明白に發達してゐることは限りません。「私の子供は數は五十まで知つてゐますよ、百まで知つてゐますよ」といふ親があります。しかし滿六歳の子供では、數詞として百まで順次に言ふことが出来ても、決して百まで誤りなく實物を數へることが出来ませんし、百の數觀念どころか、十以下の數觀念でも明白になつてゐないのであります。私どもが小學校入學檢定に於て、鈕を四つ出して、

「いくつあるか」と問へば、その答に次の如き段階があります。

(一) すぐに「四つ」又は四つ答へるものがあります。この子供は四を直観して全く數へることなく直に四つ答へることが出来るもので數觀念の發達した子供であります。

(二) 鈕にさはらないで頭の中なり眼なりで數へて「四つ又は四つ」答へるものは次位に數觀念が發達した者であります。

(三) 鈕について「一つ、二つ、三つ、四つ」を數へるものは充分四の觀念が發達してゐません。

先づ鈕を四つ出していくつかを尋ね、次に更に三つ出して皆でいくつあるかを尋ねる、その答によりて次のやうになります。

(一) 直に七つ又は七つ答へる兒童は滿六歳の兒童としてよく七の數觀念が發達してゐるものであります。

(二) 四つに三つミ頭の中で考へて七つまたは七ミ答へるものは次位であります。

(三) 四つに一つで五つ、それに一つで六つミいふやうに、實物に觸れないで、七つミ答へるものは第三位であります。

(四) 四を一團ミしてそれに五つ、六つ、七つミ三の實物を數へ足して七つミ數へるものは更にその次であります。

(五) 四つの實物ミ三つの實物ミを初めから悉く數へて七つミ數へるものは滿六歳の兒童ミしては數觀念の發達が多少おかれてゐるものであります。

かくの如くであるから幼兒の數觀念を發達させるには、大人の數觀念を押付けて「四に三足せば七ですよ」、「四に五を足すよ九」、「九から二を引くミ七」など、教へるやうなミミは禁物であります。成るべく機會あるミミに實物を數へさせるやうにせねばなりません。「このビスケットがいくつあるか」、「このキャラメルはいくつあるか」、「この蜜柑に袋がいくつあるか」、等ミ子供に尋ねて實物を確實に數へるやうにせねばなりません。そして次第に數範圍を擴大するミ共に、五以下の數は一々數へなくも直に答へられるやうに數の直觀が出來、更に實物をはなれて抽象的に數觀念が發達するやうにせねばなりません。

## 五

これも特に入學檢定の準備ミいふのではないが一般に幼兒教育上重要なミミであるから述べます。それは成るべく幼兒の感覺器官を働かせて、幼兒自身がいろいろの事物を觀察するやうに導くミミです。例へば「甲の林檎ミ乙の林檎ミミがちがつてゐるか」ミ尋ねて、子供にその二つの林檎を見くらべさせてその相異を發見させるやうになすミミがよいのであります。幼兒にも甲乙二個の林檎を比べてその相異を二つや三つ、明白に發見出來る答であります。それを大人が甲の林檎

「この林檎、さかくくの點が違つてゐるから、よく覺えて置きなさいな」と、大人の觀察比較の結果を幼児に記憶させるやうなことは頗る非教育的であります。子供が甲乙の林檎をよく觀て、よく觀比べてその相異を發見することによつて、その子供の觀察が精密になり、その觀察力が發達するのであります。また比較觀察をすることによつて、比較抽象の力も次第に發達するのであります。勿論林檎の觀念は實物をよく觀察することによつてのみ明白になるのであります。子供によつては色に注意するもの、形に注目するもの、大小に或は輕重に注意するもの、更に光澤に注意するもの、または内部や味にまで注目するもの等、いろ／＼の觀察型があり、それ／＼發達階程があるのであります。單に大人の觀念を押し付けて死んだ知識を多く子供の頭腦に注入せんとするが如きことは頗る禁物であります。こんな檢定準備は却つて兒童をあまりさせることになります。檢定の時、教師の間はないことをお話する子供が往々にしてあります。それは家庭や幼稚園に於て「こんなことがキツト出るから」この當推量から、幼児に器械的に死んだ觀念を注入した結果であります。檢定する方ではそんなことで幼児の能力檢査をいたしません。それでどこまでも幼児が正常な精神發達をなすやうに幼児各自の心身を働かせることが肝要であります。